

# 閃光の影で

原爆被爆者救護  
赤十字看護婦の手記





# 発刊にあたって



日本赤十字社長崎県支部  
支部長 久保 勘 一

日本赤十字は、明治二十年に国際赤十字に加盟し、直ちに赤十字看護婦の養成をはじめ、災害時の救護および救恤事業を推進いたしております。

なかんずく、幾多の戦役・事変における救護員の献身的な努力に対する世の中の信頼は今更申しのべるでもありません。

私は、日本赤十字社長崎県支部長に就任して十年になりますが、この間、原爆病院の運営、血液事業の推進など順調な歩みが続けてまいりました。

これまでの県民皆さまの日赤に対するご理解とご支援に、衷心より感謝の意を表します。

さて、私は中国の大陸において終戦を迎えましたので、原爆の洗礼は受けておりませんが、引き揚げて長崎に帰り、その悲惨さに驚きました。

原爆の投下によって長崎の街は、生き地獄と化し、七三、〇〇余の尊い生命が一瞬に奪い去られ、さらに生き残った人々も今なお後遺症に悩んでおられる現在、これらの方々に救護の手を差し伸べなければならぬと、知事の立場から国に強く訴えております。

原爆投下三十五年目にして、日本赤十字社長崎県支部で、当時被爆者の救護につくされた日赤看護婦さんたちのご協力により、このたびこれらの方々の手記を取りまとめ出版する運びになりました。

うら若い乙女たちが、人道の旗じるしの下に、赤十字の理想を達成するために、全力を傾けて被爆者の救護に当られた足跡に深く感銘するものがあり、感謝の念にたえません。

一九八〇年代を迎えた今年の赤十字国際標語は、『赤十字!!みんなのために、どこにでも』であり、この力強い赤十字活動をはかるため

“人類の苦痛を軽減する”という赤十字永遠の使命を達成するべく、社会の期待にこたえるよう努力してまいる所存です。

不幸にも原爆の犠牲となられた方々のご遺族、生存被爆者の方々をはじめ、若い世代の方々にも広くこの手記が読まれることを念願するとともに、再びあのような悲惨さをくり返さないよう心に誓って発刊のことばをいたします。

## 原爆被爆者救護の赤十字看護婦 (県支部関係)の活動概要

昭和20年8月9日

○原爆落下後、直ちに長崎市新橋町にある日赤長崎県支部長崎診療所に被爆者多数が治療にくる。

滝口育之医師ほかで連日不眠不休の救護に当たる。

(藤井・野崎・松原・長田看護婦等)

○大村海軍病院特別救護隊第一陣が浦上地区に到着。井樋ノ口交番所附近で救護に当たる。

○全病院特別救護隊第二陣が到着。直ちに稲佐小学校に臨時救護所を設置。救護に当たる。

8月14日

○長崎市西山町長崎経済専門学校に日赤被爆者救護所を開設。

○日赤長崎県支部は、大阪の空襲によって

一時帰郷中の大阪看護専門学校委託学生や在郷中の看護婦に電報で非常召集する。

8月15日

○鎮西集団の命によって兵站病院を假編成。長崎市戦災者救護の目的で佐々木義孝院長以下一〇七人で長崎市に急派。

長崎経済専門学校救護所に収容中の患者一七二人を引き継ぎ治療に当たる。

8月16日

○兵站病院は本日以降假編成第二一六兵站病院と改称して、被爆者の救護に当たる。日赤救護班の増員によって病院長以下一九九人となり、日毎に増える被爆者の救護に不眠不休で活躍する。

8月16日

○佐世保海軍病院から救護班(看護婦は長崎市出身者を主体に)が列車で夕方長崎に到着。また医薬品を満載したトラック二台も佐世保から到着。直ちに被爆者の救護に当たる。

# “発刊をお祝いして”



日本赤十字社長崎県支部  
看護婦同窓会

会長 坂井 シズヨ

長い間の夢でありました原爆被爆者救護の赤十字看護婦の体験手記が、今般ようやく日の目を見て、ここに出版されましたことを、心からお慶び申しあげます。

焼野が原となり、生き地獄となった当時を思い、そのなかで被爆者と真正面から立ち向って救護に当った私たちの仲間の看護婦・養成所学生の献身的な看護に対しまして、謹んで感謝を申しあげます。

手記の一字一句を読んで、哀れと悲しみ、憤りがこみ上げて唯々感涙にむせびます。

二度とあってはならない原爆の悲惨を世界の人々に訴えるときに、再びあのような、むごい看護をしてはならないと叫び続けたい気持ちでいっぱいです。

当時光崎市内に設けられた新興善国民学校をはじめ各救護所、兵站病院はもとより、大村・諫早などの各陸・海軍病院で献身的に、まさしく赤十字精神を発揮して被爆者の看護に当たった

方々!!ほんとにご苦勞様でした。

とくに家族の中には被爆者がありながら、召集という名のもとに私ごとを振り捨てて、救護に従事された方、または養成所に入所して間もない、まったく看護の看も知らないま、飛びこんだ学生の方々には何とねぎらいの言葉を申しあげてよろしいのか。当時救護本部長（県知事）から日本赤十字社長崎県支部長に看護婦派遣の要請があったとき看護婦は内・外地の陸・海軍病院にそれぞれ派遣され、在郷の看護婦は僅かな人員でせば詰って思いついたのが、大阪の空襲が激しくて自宅待機で帰郷中の看護婦養成所の学生の動員。早速二〇〇通ほどの召集電報をうったところ、全員がはせ参じてくれたときの嬉しさは終生忘れられないと日本赤十字社長崎県支部の故山下友市参事は述懐しておられました。

この本の出版によりまして、今まで世に知られなかった真実が、クロースアップされて、その記録が後世に伝えられ、またこの本によってお互いの消息がわかり、より一層の親交が深められますことは、どんなにかすばらしいことでしょうか。願わくばこの「閃光の影で」を多くの方々がお読みになって、原爆の恐ろしさを再認識されますよう望んで止みません。昨今世界の情勢が極めて厳しい折に、時宜に適したこの本が日本赤十字社長崎県支部で出版の運びとなりましたことを重ねてお喜び申しあげます。

8月17日以降

○新興善・勝山・磨屋国民学校に設けられている臨時救護所に佐世保海軍病院から派遣された救護班の日赤看護婦を配属。

収容患者の救護に当たるとともに浦上地区の巡回診療に活動。

○被爆者は長崎市から救援列車のほか自力で、時津・野母・茂木・国道34号などの道路を昼夜の別なく親戚・知人を頼って避難し佐世保海軍病院諫早分院・大村海軍病院・川棚共済病院等に運ばれて治療を受けた。

これら病院には日赤看護婦が、救護に活躍。

○佐世保海軍病院諫早分院には、被爆者を満載した救援列車で連日のように患者が運び込まれ、分院だけの陣容では応じられないので、小浜・雲仙の分院から日赤看護婦が急きよ配属されて救護に当たった。

た。

○十月以降占領軍管理の下に医療施設も漸次改善され、また医薬品も充足されたので、これら救護所は逐次解散したり、あるものは市民病院に移管された。

以下の内容は、映画のエピソードとの重なりを多く感じた四名の方の手記を抜粋したものです。なお、個人情報に配慮し、文章中に登場する氏名は、姓のみの表現に変更しています。（県立長崎図書館）

## 原爆投下時の私 西田

昭和二十年のお盆（旧暦七月十五日）の翌日十六日昼ごろでした。精霊の送り酒を持って母とお墓参りに行ったときのことです。私の郷里は原城跡の地、南高来郡南有馬町ですが、お墓から見た海のかなた一面に、ものすごい黒煙が立ち昇っております。「あれは千々石でしょうか」三菱造船所から帰郷していた勢松さんが『いや長崎方面ですよ、あの煙はただごとじゃなか。きっと敵が煙幕を張って上陸しようとしてるんじゃないか。長崎に上陸したならここにも押し寄せて来るじゃろ。女子供はどこかに逃げて隠れとらんといかんばい』といううわさが立ちました。

翌日長崎市の十人町にいた中学二年（旧制）の従弟の子が、『浦上に新型爆弾が投下されて、馬も人も黒焦げになって倒れたり、折り返なって死んでいる。もう長崎にはおられんから親類がある人はおおかた逃げ出している。僕もその人たちと一緒に夜通し歩いて山越えして来た』と話しました。私はあの黒煙がそうだったのかと思ひ

ながら『とにかく早うあがらんね。ひもじかったろ』といって急いで食事を出しました。それから二日ばかりして八十歳近くの伯母と長男のお嫁さんと（伯母の長男、二男、三男とも皆出征）子供がトラックで疎開して来ました。私の家も兄は戦死、二人の弟も出征。何年かたって兄のお嫁さんも病死。七十歳余りになる父母と子供ばかり、そこに長崎から老人と子供が疎開して来たので、てんやわんやでした。

## 召集

日本赤十字社長崎県支部（以下支部と略称）から八月十三日召集電報（軍隊の赤紙召集と同じ）を受理。汽車の都合で十四日支部に向かいました。浦上の人は全滅との話で、身内を捜しに行く人々で身動きも出来ないほど汽車は満員でした。そのうえ諫早駅では乗り換えの長崎本線が長時間延着した。

やっと長崎駅に到着、新橋町の支部にたどり着いた。支部も爆心地から約三キロのところですから、家屋こそ倒壊しておりませんでした。窓ガラスは破壊され、屋根がわらが飛び散っていました。室内は破壊した道具類をすみに寄せてあるだけで本当にまだめっちゃめっちゃでした。

永い間救護係をしておられた井原書記は被爆時以前に退職しておられたとか、救護係の書記は欠員で山下参事が兼務しておられ、支部も多忙のようでした。

それで支部診療所勤務の古賀看護婦が救護員の召集とか派遣の準備等で忙しそうでしたので私も倉庫の二階にある貸与用のエプロン、腕章出しに加勢しました。

日赤は平時災害救護、戦時救護派遣の場合には、制服、制帽、白衣、エプロン、手袋、くつ、水筒に至るまで貸与出来るよう常備して置かなければならない規定になっていると聞いております。それはいつでも救護派遣が出来るよう義務付けられているからということです。救護準備の衣類が備えてある倉庫も雨漏りで水浸しのところもありました。嚴重に保管されている衣類の中からエプロンと腕章等五人分（支部で一緒に集まった私以下看護婦五人）取り出して借用しました。

古賀看護婦に『経専（経済専門学校、元高商）に行けば受付があるから直ぐに行って下さい』といわれて、五人は支部から下西山町通りのドロコ道を小走りにして経専正門前にたどり着きました。そこには、救護対策係の方が二人机を出して受け付けておられました。婦長以下五人の職、氏名を記帳し、早速講堂に行き、そこに発着所を設け、ムシロを敷き詰め、要員が担架や戸板でどんどん搬入する患者を収容しました。すでに担架の上で死亡している患者はそのまま運動場の小屋の方へ運びました。息絶え絶えの患者その他いろいろの患者で場内は足の踏み場もないほど満員になりました。講堂だけでは足りず、図書閲覧室も満員になりました。

応急処置だけは被爆地で施してありました。『軍隊と日赤の看護婦さんが治療して下さい』と患者付き添いの話でした。その救護隊が引き揚げたからこの経専に救護所を開設したのだそうです。

## 病室

ムシロを敷いてあるだけで何の設備も無い病室に、身内も付いていない患者がほとんどでした。炊き出しの握り飯を、顔一面包帯していながらもがんばって食べている患者もいました。上半身やけど、自分の手で食べられない人には私たちが貝杓子や、水杓子にお湯を入れ庭の木の小枝を折って、はしの代わりに使い『お口を大きく開けて下さいよ』と口の中に流し込みました。開けた口の中に白い物が動いている。何かしらとよく見ると、ウジ虫でした。こんなところにまでウジがいるなんて驚いてしまいました。ウジ虫を取り除いて、お握りを柔らかくしたものをそそぎ込んであげました。握り飯の中にみそが少し包み込んであったのでおかず無しでも食べられたのでしよう。

外科病室には青年が多く鹿児島県出身といっていました。徴用で三菱製鋼所に来たのでしょうか、食べ盛りの年齢です。やけどしていても最初ほどの患者も二個の握り飯を喜んで食べました。（戦争中一般家庭には白米の配給はほとんどなかったが、軍ならびに各市町村には多量の白米が、非常用に備蓄してあった。それが原爆投下後一斉に放出された。被爆者たちは久しぶりに見る米の握り飯に喜び重症の患者も泣きながら食べたという）。

内科では次の人たちを覚えております。一本木（現三原町）の片岡さん。当時四十歳ぐらいの女性『私は大病院に診察受けに行っておりましたが、昼ごろピカーツと光ったと思っただけであと大変でした。』と話していました。内科にも鹿児島県出身の青年がいました。外観は初め何もなかったようだったが体に紫の斑点が出たかと思うと翌日には吐血して死亡されました。

三菱船型試験所の技師長がやけどで入院しておられた。その奥さんが、元気だったのに何日かたったら急に体に変調を来し亡くなられた。その奥さんの生前の話『娘も爆弾に遭って死にました。私も死ぬのではないでしょうかと、それがあたりました。』

当時は外観はどうも無いような人でも三、四日の内にゴロゴロ亡くなり、生存者も死の恐怖に脅かされていました。私はその話を聞いたとき慰める言葉もなかった。

私は朝早く病室を見回っておりまして。ある朝、ムシロがもり上がっていたので、ソーツとのぞいてみると、亡くなられた人と肉身の人と一緒にムシロをかぶって寝ておられるのを見て胸の痛みを覚ええました。

外傷も無いのに斑点が出て吐血したり頭髪が抜けたり下痢したりしてたくさんの方が亡くなりました。この救護所は内地といっても戦場です。家族の付き添いもない患者が『畜生！畜生！』といいつながら、また高熱の女性の患者は『飛行機が！飛行機が！』とうわごとのように口走って他界しました。

戦争中は、家庭はもちろん、建築物のある所には防火用水とバケツを常備しなければなりません。病室の下痢患者はそのバケツで排泄物の処理をしていました。私は看護人まで倒れてはいけないう手の消毒だけは何とかしなければと思って近くの県立高女（東高校）の家事室から洗面器と台を借りて来ました。消毒用のクレゾール液はどこからか、看護婦が捜して来ました。

私は、看護状況を記録して支部に報告しなければならぬ。何か事務用品はないものかと、図書室に行ったら、ノートが積んでありました。二、三冊持ち帰り、一冊は発着所受付で患者の住所、氏名を記入するのに、一冊は召集令状を受理次第、来る看護婦及び生徒の住所氏名を記入するのに使いました。また十七日からは外来患者、入院患者の治療統計等を記入しております。その記録によると次のようです。

外来患者、実数二五二人、延べ一〇〇〇人（男四四九人、女五五人）裂傷（男二一七人、女二九七人）熱傷（男一四三人、女一四七人）以下爆傷、挫創、切創、骨折等の病名が記入され入院患者数、男六一二人、女四五六人、延べ一〇七七人取り扱っております。

### 軍救護隊到着

経専救護所を開いて二日間、薬も無く治療設備も無く患者は亡くなるばかりでした。

八月十六日軍隊が行進して入って来たときのうれしかったこと。

これで患者の治療が出来ると思いました。以後は仮編成二一六兵站病院となり院長は佐々木陸軍軍医中佐でした。医員平川陸軍軍医中尉もおられました。

早速治療が始まりました。外科患者は上半身やけどが多く、暑い盛りだったから上半身裸で作業していて、直接放射線が皮膚に当たったのではないのでしょうか。下半身はズボンを履いているからさほどでもありませんでした。

被爆地で応急処置法してから四、五日は経過していて、その間何の治療もしてありません。包帯をハサミで切り開くと、モリモリツとウジの山です。膿は吸い尽くされ、筋肉が引き込むほど食い込んでいます。首筋の血管も食い破られ包帯を解くと同時に血液が噴き出る患者もありました。ウジ！ウジ！人間の体にこうもウジができるのでしょうか。

原爆とわかってからは被爆地には七〇年の間は草木も生えぬ。といわれていたのに、ハエだけはどこにどう生きていたのでしょうか。それとも後から人に付いて入ったのでしょうか。患者の体にピツタリ包帯をしてあるのに、あれほどウジ虫を産みつけるとは。家庭から供出した布切れでしょうか、それでウジ虫をこすり落とし、筋肉に食い込んでいるのをはしでつまみ出し、（軍隊が来てからははしもありました）。つるべにリバノール液を入れ、ガーゼを浸し、手で絞ってどんどん傷に当てました。普通病院では消毒したバットにガ

ーゼを入れ、リバノール液をかけて鉗子で絞りピンセットを使い、絶対に手など直接触れません。この場合そうしてはおられないのです。腕時計も黒焦げになって、十一時二分を指したまま止まっておりました。腕を治療するための患者のも外して一カ所に集めて置きました。

ガラスの破片摘出、骨折、創傷の治療、盲腸の手術等もありました。兵站病院になつてからはいろいろ治療は行き届いていたと思いますが、亡くなられる方は後を断ちません。あんなに喜んで握り飯を食べていた患者も翌朝行ってみると、下痢して死亡しているのです。それを衛生兵がムシロともども包んで一室に山積みし、要員がゴミ取りの大八車で運び出しておりました。どこか空地で火葬にしていたということでした。全くこの惨状はこの世の生き地獄でした。

ある当直の夜、こんなことがありました。室内には薄暗い裸電球がぶら下がっておりました。軍隊の特設発電と思いますが（一般家庭に完全に電灯がついたのは昭和二十三年六月一日の夜からでした。うれしくて今もはっきり覚えております）

病室から少し離れた所に遺体を山積みした室と解剖室がありました。その近くにトイレがありました。その暗い所から真っ白いものがふわり、ふわりとこちらに向かって来ます。全身冷水を浴びせられたように、ゾーツとしました。休憩しているもう一人の看護婦を呼んで来てジーツと息を殺してよく見ておりますと、それは患者だ

ったのです。ほっとしました。口と目だけ除いて、上半身全部包帯をしていて、腰下はズボンを履いていたので見えずに真っ白いところだけ浮いて見えたのでした。

(吉富現市民病院婦長さんの話)

### 救護班宿舎

私たち日赤救護班は、長崎経専救護所に患者を収容したその夜は富貴楼に、新興善小学校（戦時中は国民学校と呼んでいた）の日赤看護班も一緒に宿泊しました。当時富貴楼は三菱の寮になっておったそうです。

大広間に全員ゴロ寝でした。どこも同じでここも激しい雨漏りでした（百年有余の歴史ある料理屋とかで現在は立派になっております）食事は上長崎小学校で炊き出しの握り飯とタクアン二切れでした。婦人会の炊き出しということだったので、私はこの救護記録を書くため、地元上長崎地区の婦人会だったろうかと思って富貴楼の奥さんに尋ねたところ「弟が被爆したので私は飛んで行きましたから、婦人会のことは何も知りません」という話でした。とにかく長崎の方々は被爆者で救護される方だったから市周辺の婦人会だったのでしょうか。病室にも、モロブタに入れて運んで下さいました。

十七日軍隊が入ってから、私たち日赤救護班員は全部宿舎を経専の寮に移し、看護婦の仕事の割当も決め、当直も始めました。池内看護婦を主に患者治療係、牟田看護婦を炊事係にして経専寮の炊事

場で食事をしました。（炊き出しは軍隊から分配がありました）他の看護婦、生徒も病室と炊事に配属しました。

とにかく病室の一種独得の悪臭と過労で食事もノドを通らないくらいでした。炊事係の牟田さんが馬町の人だったので非番の看護婦を連れて、自分の家からはもちろん、親類、知人の家からも何かと頂いてきたり、他の看護婦たちも市内の人は自宅から野菜など持ち寄って炊事係が工夫して料理してくれました。往診に付いて行って患者さん宅からもカボチャを頂いたそうです。当時どこの家庭でも衣類、その他いろいろの物を持って農家に行き、食糧と換えていた時代だったのに、ご協力して下さったご家庭でもきつと貴重な食物だったろうと思います。

カボチャは立派なおかずでした。現在のような改良した物ではないが、あのころはおいしく頂きました。それもこれも私たちが被爆者を看護出来るようにとの思いやりからのことと皆さまの善意に感謝しました。私たちも献心的に働きました。先日（五四年七月）長崎市民病院へ行って吉富婦長さんと経専救護時の話をしたとき『被爆患者看護のときほど真剣になったことは今までありませんでした』と吉富さんも目をうるませていました。

召集電報を受け取ると一刻も早くと思って日赤支部へ出頭し着替えの下着も持たず着の身着のまま一週間近くふろにも入らなかつたけれど自分の体を思っている暇ありませんでした。軍隊が来てからは経専の寮のふろを兵士が沸かしておりました。兵隊の入浴が終

わってから私たちも入れてもらいました。銭湯のような大浴槽でしたが、脱衣所に大きな白い丸々肥った着物シラミが足をモザモザしているのを見ると気持ちが悪くなりました。私は戦場で、中腰でも上半身はお湯につからないような湯ぶねに芋洗いのようにして、十分か十五分で入浴していたようなときでもノミやシラミは見たことありませんでした。私はこの経専のふろに何回か入りましたけれど、若い看護婦たちは寮の裏の井戸端で暗くなってから行水をしておりました。

私は三十四年ぶりにその井戸を見に行きましたところ、当時の寮は無く、木造の古い建造物一階建てに合気道の看板が掛けてありました。その近くに草ぼうぼうの中に木のふたをかぶせた古井戸がありました。私はあのころのことが思い浮かんで涙がこぼれました。

患者を収容した講堂も校舎も現在は近代建築の洋館建てになっておりました。あれだけたくさんの人々がここで亡くなられた跡です。

合気道の部屋にいた一人の学生にいろいろと尋ねましたが『私は当時のことは何も知りません、済みません』とっていました。国のため！国のため！といって働き、最後は悲惨な犠牲に、憤りをこめて叫びながら他界された人々のことも年を経るとともに忘れられていくのではないのでしょうか。亡くなられた方々の気持ちを百分の一も千分の一も表現出来ないけれど、何か記録を残しておかなければいけないように思いました。

## 解散

私は救護所から諏訪神社下の広い道を通って寺町を歩いて、新橋町所在の支部に交渉、連絡によく通いました。十月初め支部に行く途中神社下でおくんちのみこし担ぎの人々を見かけました。静かな表情でした。おくんちがせめてもの心の救いになったのではないのでしょうか。（お下り、お上りの神事だけは戦中、戦後も欠かさなかった。（郷土史家永島正一氏の話）

それから何日かたって救護所も閉鎖することになりました。患者も最初から比べると大分減っておりました。町の病院に入院する人、家庭に連れ帰る人、残りの患者は新興善小学校の救護所に移しました。

県立高女から借りた洗面器と台は返納し、経専のおばさんから竹ぼうきやぞうきんを借りて病室や内庭の掃除を終え、記録した患者名簿は支部に渡し、看護婦、生徒名簿は現在も私が保存しております。三十四年たった現在も被爆者証明をするのに、また記録の名簿を作るのにも役立つております。支部に渡した患者名簿は、前記のように、支部の方々も被災者ですし、当時の人たちも亡くなられたり、退職されたりで、現在当時の方は一人もおられず報告書も無いそうです。

経専のおばさんは当時六十余歳だったでしょうか、とても親切で患者に飲ませるお湯を五升釜で沸かしたり、炊事道具を貸したりしてよく協力して下さいました。

## 耳の穴でうぐいめくウジ 看護学生も卒倒 高原

第二十七回婦長候補生として、日赤中央病院へ派遣されていたのが、戦局拡大に伴って、一時帰省を命じられてその申告に日赤長崎支部へ来ていました。

支部局長への申告をすませた私は、同支部診療所に勤めている松尾さんに東京での話をしていました。そのときに、世にいう原子爆弾が長崎市の北部西浦上に投下されたのです。

当時診療所には、滝口医師、藤井婦長（故人）と松尾看護婦がおり、支部の事務局には、清野書記さん、岩田さん、長田さん、亀崎さん等おられたように思いますが、なにぶんにも昔のことですから確かなこととはいえません。

広島と同じ新型爆弾とは後でわかったことであって、そのときは、ピカーツ、ガラガラという、すさまじい音と、眼を刺す光でした。稲妻のように思えました。

私と松尾さんは無意識のうちに床に伏せていました。時間にしてどれぐらいたったのかわかりませんが、気がついてみると「ガラス」による切り傷や、たなのものが落ちて受けた打撲傷やら、頭からほこりまみれとなっていました。

爆弾投下後しばらくすると、支部診療所には、けが人が続々と詰めかけてきはじめました。血を流しながらはだしで歩いて来る人、泣きながら走りこんで来る女の、急造担架で運ばれてきたお年寄りなどで、さほど広くもない支部は一杯になってしまいました。

この人たちが求めてくる所は、やはりわが赤十字だったのです。次々と詰めかけてくる患者の治療に、ただもう夢中で当たりました。

ふと見あげてみると、西の空は真っ赤に染まって、どこかが焼けているように見えます。心配になりました。治療に来た人たちの話では、市役所、県庁、長崎駅方面が焼けている、とのこと。流言飛語とは思うものの、もしや真実では？と思いい不安になる心をどうすることもできませんでした。

飲まず食わずで治療に当たった私たちは、夕方近く藤井婦長さんの命令で家へ帰ることにしました。旭町に家のある私と、竹の久保町に住む松尾さんとは、方向が同じでしたので一緒に支部を出ました。

お互い飛んでも帰りたい心を抑えて、西山越えをして歩いて帰ることにしました。それ以外に取るべき方法がなかったので……。初めて歩く道は遠いように思え、歩いていても思うようにはいかどりません。やって高部水源池の所へ来ました。ここで家へよく来る野菜売りの正太郎さんに会い「旭町一丁目二丁目と竹の久保辺りは焼けてしまっている」と聞かされたときは、もう二人して泣き

出しそうでした。とにかく急ごう！と再び歩きはじめましたが、屋間の疲れと慣れぬ道とですっかりへたばってしまい、本原町あたりで日がとっぷりと暮れてしまい歩くに歩けなくなり、やむを得ず近くの防空壕に泊めてもらいました。（たぶん賀来病院の辺りだったという気がします。）壕の中には赤ん坊もおるらしく、暗やみの中を乳を求めて泣く声、それをあやしているらしい老人の声……。今だに忘れられません。防空壕での何ともいいような心細い一夜を明かした私たちは、お礼をいうのもそこそこにわが家を目指して歩きはじめました。しかし、そこに見たものは、爆風で倒壊した家、その家の下敷きで圧死した人、農家が多かつたらしく、熱線のため焼け落ち廃虚と化した惨状でした。汽車も道ノ尾駅から先は不通でした。破れてポロポロになった衣をまとい髪を振り乱して半狂乱のように街を歩いている人、泣きわめきながらはだしで走り抜けていく人、このような情景は経験した者でないと、到底理解できないことでしょう。

何ともいいような心を抱いて私たちは黙って線路沿いに歩きました。どれくらい歩いたか、やっとの思いで竹の久保付近にたどり着きました。しかし、辺り一面焼土、がれきの山で、どこが自分の家かわからず、ぼう然と立ちすくむ松尾さん、今にも彼女が卒倒するのではないかと思うぐらいでした。やがて気を取り直して、ひとまず私の家まで連れて帰りました。私の家は炭、マキ、米、の小売をしていましたので表通りに在り、割合にがんじょうにできて

いたので家としての原型はとどめていましたが、それでも軒は傾き、戸障子は破れ、ガラスというガラスはみんな割れていました。家の者は、二日も帰らぬ私を、てっきり爆弾でやられて死んだものと思い、せめて遺体でもと捜しに出かけようとしているところだったので、泣いて喜んでくれました。

伯母の作ってくれたお握りのおいしかったこと、まる二日何も食べていなかったのだから……。食べながら、道々で目撃したこの世のものとも思えない惨状を話して聞かせていると、町内会長さんから稲佐署へ救護の手伝いに行つて欲しい、という要請がありましたので、一休みしてから出かけました。家族のことがどうしても心配な松尾さんは私の家でしばらく休んだ後で再び竹の久保へと、とって返しました。しかし彼女は全くお気の毒で、八人家族のうち三人が即死、残りも彼女一人を残して次々に倒れてしまいました。

たった一個の原子爆弾が、長崎の上空で炸裂したばかりに、見るも無惨な情景がこちらに発生したのです。この残酷な行為は断じて許せません。

支部の亀崎さんが持ってきて下さった赤紙によって支部へ出頭しました。

先に来ておられた村田婦長さんに同行して、長崎経専戦災救護所に行き早速仕事にかかりました。私は岸本さんと二人で発着所勤務です。

経専の図書館と同窓会館の床にムシロを敷いただけの広々とした所が発着所に当てられ、ここに運びこまれた患者を最初に收容しました。患者は次々に運びこまれ、さしもの広い発着所も足の踏み場もないほど患者でいっぱいになりました。

收容した患者の中に学校友達の片岡さんがいました。彼女は、さほど外傷もなく初めのうちは元気で、笑い声などあげることもあるくらいでしたが、そのうち、全身倦怠を訴えはじめ、皮膚や粘膜に出血が現れ、発熱さえてきました。頭髪も抜けはじめ歯ぐきから出血も見られ、下痢、嘔吐がつづき熱も四十度近くになり、うわ言をいい、次第に衰弱の度を加え、とうとう亡くなりました。

スポーツマンでしたので、色は浅黒いけれど大きな瞳の、とてもチャーミングな美人でした。心の優しい思いやりのある人で、熱心なクリスチャンでした。彼女の胸に提げたロザリオが今でも目に浮かびます。

片岡さんのように一見何事もない患者でも放射線を浴びた者はすべて、多少の差こそあれ原爆症に侵されていました。

『看護婦さん、耳の穴がゴソゴソいいます、何か入っているのではないですか見て下さい』と訴える患者さん、早速包帯をほどいてみると、耳の穴は、うごめくウジでいっぱいです。思わず、ウエッ！と吐き気を覚えました。竹製のピンセットでウジ退治です。湯のみ茶碗に半分ぐらい取ったでしょうか、突然ドターン！と物が倒れる音がしました。何だろうか、と戻ると、助手の看護学

生が湯飲みのウジを見て貧血を起こして倒れた音だったので。無理もないと思っています。とにかく、傷という傷にはウジがわき、それを取るのにまた一苦労したものです。

平川軍医について往診にも行きました。西山の石田さんとおっしゃるお宅で、息子さんが熱傷と、ガラス破片創を受けておられ、その治療に通いました。

何回目かの治療のとき『家で作った野菜です。みなさんで召しあがって下さい』と患者のお母さんから、カボチャ、キュウリ、ジャガイモ等の貴重な食糧をいただいたときは、本当にうれしかったことを今でも忘れません。

また敗戦の年は天候にも恵まれず、夏だというのに毎日のように雨が降りました。日本の敗戦を悲しむかのように、枕崎台風も確か、この年だったと思います。

看護宿舎も雨漏りがひどく、裸電球の薄暗い中を、あっち、こっち布団の移動をしたものです。老朽な建物だったので屋根がわらわらずれていたのでしょうか。

救護活動も終わり近く、宮内省から陛下のご名代として、お名前が忘れましたが侍従の方が原爆救護の現状視察に見えられました。典型的原爆患者を担架に乗せて、制服姿の婦長と白衣姿の看護婦が付き添いました。やさしいお声で、ねぎらいの言葉を下さったように思います。

私たちは本当によく働きました。それこそ昼夜の別なく働いたものです。十七、八歳ぐらいから二十三、四歳ぐらいまでの若い者ぞろいだから出来たことと、われわれは赤十字の看護婦だから、こうしなければいけないのだ！という責任感、義務感のようなものがあったからだと思います。

被爆後三十有余年がたちました。原爆孤老の寂しい死とか、孤独と絶望の果ての死とか、新聞で折にふれて報じられるのを見ると、幸いにも今まで生きながらえ得た私たちは、何をしてあげればいいのでしょうか。

戦争を知らない子供たちや、原爆を知らぬ若者に語りかけて、今もって病床に呻吟する被爆者の方々に愛の手を差し伸べて欲しいとお願ひするものです。

戦争や原爆の残虐さや悲惨さを経験するのはもうたくさんです。世界が一つの輪になって平和であって欲しいと心から祈ります。

平和！ 平和！ もう聞きあきました。

いくらどなつたとて、叫んだとて

深い空に消えてしまうような頼りなさ

何等の反応すら見出せぬ焦燥に

すっかり疲れてしまいました

今まで焼け死んだ者たちが

かわいそうで泣いてばかりいたが

生きる不安と苦しさを知らないだけ

いまでは幸福と思う……

原爆詩人福田須磨子さんの詩「ひとりごと」より

## 死んでいる母の乳房に 山下

蒸し暑い夏の日、雲が浮かんでいました。私は大阪日赤の一年生、四月に入学したばかりで、数カ月しか教育を受けられないまま戦争の激化で、七月に強制疎開して郷里に帰省していました。私の家は当時西彼杵郡三重村畝刈で、長崎から十キロぐらい離れた所になりました。忘れもしません昭和二十年八月九日、暑いので木の陰に涼んでいました。やかましいセミの声を聞きながら……

田舎でも毎日の敵機襲来のため空襲警報が出ていました。その日はちょうど警戒警報解除でほっとしていた午前十一時ごろです。かすかな爆音が山の彼方から聞こえてきました。空を見上げると、白い物体が山の上を斜めにゆっくりと落ちていくのが見えました。すると間もなく鋭い閃光が眼に飛びこんできたのです。私はびっくりしてすぐ近くに爆弾が落ちたと思いました。思わず反射的に顔を伏せうつぶせになりました。その直後大音響がして、とても大きな爆弾が炸裂したに違いありません。爆風で家の雨戸は吹き飛ばされ障子は外れていました。私は何がどうなっているか全くわからず、周囲を見回すと大した被害はない様子でほっとしました。しかし爆弾が落下したと思われる場所の空は一面に煙で覆われ間もなく煙幕を張ったような雲に広がり、見えていた空は一面に暗くなり太陽の光が消されてしまった感じで夜のようなのです。その現象がはなはだしくなるにつれ、まるで世の中が変わった感じでした。

私は不安と心配の中で、とにかく道路まで出て見ました。長崎に通じている県道の所まで行くと近所の人たちも不安げに話をしました。一時間余りすると、道ノ尾や浦上方面から来る人たちが数カ所に負傷ややけどをして歩いて来たのです。

その中で一番印象に残ったのはまずあれだけのやけどをしていたら髪の毛が焼かれているはずなのにちぢれてもいないのです。普通のやけどなら髪の毛と一緒にやられるのにどうしたのでしょうか。ちょっと違うのです。その人たちの話では浦上の兵器工場の近くに新型爆弾が落ちたとか、全く見当が付きません。

帰って来る人来る人、皆さまざまい姿をしていました。その人々の中には私の知人や友人たちの顔も見えました。浦上の兵器には私より一級上の人たちが徴用で召集され勤務していたのです。川添さん、平川さん、小川さん、山口さん、川瀬さん、その他にも知人の安否が気遣われてなりません。全く消息もわからぬぐらいの町の様子とのことでした。その後、川添さんが足にすごい裂傷を受けて戸板に乗せられて帰って来ました。傷は骨までやられていました。早速隣村（村松）の医院に戸板で運び治療していただきました。

来る日も来る日も暑い日に仕方なく通院しました。一時間もかかる道のりです。川添さんは暑さと食欲不振のため衰弱がはなはだしく本当にかわいそうでした。傷は治るところか化膿し皮下の部分には、ウジ虫が巣を作って中からポロポロ出て来るのです。膿汁は滲出がはなはだしく、ガーゼ交換にもガーゼが無くユカタを洗って使

用しました。どれほど経過したときか、はつきりと覚えていませんが急に全身に出血斑が出てきました。熱は高く全身状態も悪化し、鼻出血が始まり口内炎が生じ口蓋部にカイヨウが出来、一部に穴があきました。

このころ傷の周辺がリピード色を呈して来ました。そして三日目でしたか、皆の悲しみを知らぬまま昏睡状態になり、とうとう亡くなったのです。髪の毛もほとんど抜けていました。今思えば急性白血病の症状と一致しているのです。昇天した魂に向かって安らかにと心から祈りました。

そのうち日赤長崎県支部から電報で「スグ、シュットウセヨ」との召集がありました。大急ぎで衣類をトランクに入れ、翌朝早く出発しました。乗り物は全く無く家から道ノ尾駅まで二時間、重いトランクを父に持っていただけ、私は手荷物を持って、一路支部にと急ぎました。約一時間歩いて浦上駅に着きましたが余りの変りようで、全く見当が付きません。さらに一時間行って長崎駅、そして休まずに三十分ぐらいかかり支部に着きました。

当時支部は新橋町にあり藤井婦長さんがおられました。着いて間もなく仮救護所の片瀨町にある長崎経専に行きました。父は汗びっしょりになっていましたが、そのまま家に引き返しました。

経専では校門を入ると右手の入り口にある診療所兼入院室で勤務しました。当時の私たちの教育は英語の部分は墨で消し、すべて日本語での教育でした。今思えば笑い話ですが、その経専の診療室で

軍医殿から「ピンセット」といわれて「キョトン」としたことを今でも思い出し何かいい知れぬ悲しみを覚えています。私たちが習ったのは尋常鑷子としか教えてもらえなかったのです。本当に情ない話です。いろんなことがあるうちにクラスメート、軍医、先輩、婦長、支部の人、町内の人、本当に懸命にがんばりました。

治療に來た人や運び込まれた人たちは行き先も無く、教室が入院室、ムシロや毛布を敷き詰め休ませました。男も女も年寄りも子供も皆一緒でした。顔半分焼けただれ、ふくれ上がって見るも悲惨な姿です。耳の穴や鼻からは灰色のウジ虫がポロポロ出る。歯ぐきからは出血、眉毛は抜け頭の毛も抜け紫斑点は出る、本当に生きてるのが大変です。

以前私が川添さんのとき見たのと同じでした。このような大勢の患者の中で、わが子をしっかりと抱きしめ眠ったままの姿で死んでいる母親、その母親の乳房にむしゃぶりつき、泣きじゃくっている乳児、死んだ者が苦しかったか、生きている者が苦しいのか、このときから皆の苦しみが初まったのです。

昇天した人々をムシロで包み川端で焼き、ただただ亡くなった人々に心から念仏を唱えるだけでした。治療するにも衛生材料の無い救護所、ほとんどの薬品や医療品は軍の物でした。昇天ガーズは一枚ずつ包装されていました。包帯は足りないので着物の裏地やゆかたを裂いてつなぎ作りしました。そして汚染されたガーズや包帯を再生

するのも私の仕事でした。来る日も来る日もこんな勤務でした。予防衣を着用し、寄宿舎はたしか経専の中だったと思います。

経専救護所は一応落ち着き私はそのまま、新興善救護所勤務になりました。寄宿舎は富貴楼で、そこから通勤です。新興善救護所では、小笠原さん、平野さん等が一緒でした。また予科練生の人も見えて私たちと一緒に救護の手助けをしていました。松本さんといって頭は丸坊主で大きな人がおられたのが印象的でした。食事はトウガヤカボチャ等がよくありました。またこの救護所には朝鮮人の負傷者が多く、夜勤していると薄暗い電灯の下で「アイゴーアイゴー」と訴える声が本当に悲しく聞えました。そのうちアメリカの軍医も一緒に治療に当たり（包帯材料持参、今思えばプラスマ等の点滴注射もなされました）患者を順々に並べながら点滴を施行して行き、その介助を生懸命しました。

夜になると校庭のすみで死体が焼かれた。赤々と燃える火を見ながら毎日勤務しました。親友や知人も昇天して行ったむなしさ、(K)さん、(H)さん、(Y)さん安らかに眠って下さい)あの急性白血病症状に類似した患者の様子、出血斑、出血、脱毛、発熱、意識障害それが急激に生じ急死される経過を思い出し、現在原爆病院勤務の私には折々考えさせられることばかりです。やけどの悪臭、ウジ虫膿汁、暗赤紫色の創等原爆症の特徴です。

二度とこの様な現実があつてはならないのです。あれから三十五年まだまだ原爆のツメ跡は残されています。亡くなった人々もきつ

と人間らしく生き、人間らしく生涯を終えたかったことでしよう。幸いに生きる喜びを持てる私も貧血に悩みながらも尊い大切な人生を生き抜くつもりです。二度と原爆の苦しみは見ることがないように世界の人人々に訴えます。最後に幾多のみ魂の安らぎをお祈りします。

## 全身やけどで無事出産 田川

八月九日、晴、暑い日だった。近所の友人中富さんが時津の左底に荷物を疎開したと聞いていたので行って見たら家の中はガランとしていた。そこにお母さんが印鑑を忘れて手続きが出来なかったと帰って来られた。『もう十一時近くだから昼から行ったら』、『午前中に終わらせる』とすぐ出かけられた。

私は隣りの伊藤のおばさんの家にいた。突然ピカッと光り空は真っ暗くなり、同時になんともいえない黄燐のような独特のにおいがした。縁の方に行こうとしたら、かわらが落ちると同時に近所の家がゴーツと倒れる音がした。玄関に出ようとしたら、そこも音とともに、かわらや材木などが落ちてきたので、伊藤のおばさんが昔の大きなタンスの側で『ここに来なさい』といったのでそこへ行ってうずくまった。音が落ち着いたので外に出て見ると家は全部破壊されていた。

皆で稻佐山の方に逃げた。あの光りとおいはいつもと違った爆弾ということを防空壕内で感じた。恐ろしい原爆だったことはだれ

も知らない。いつまた空襲があるかわからないので、防空壕から出られない。夜になって出てみたら、一面火の手が上がっていた。

父はあちこちの防空壕を回って私ども（私と妹）を捜していた。妹は学徒で三菱兵器に行っていたのでもうだめだと思ったらしい。

父と妹が夜私の防空壕に来たときは声も出なかった。

「生きていてよかった、元気でよかった」と喜び合う。本当の喜びとはこんなものかと思った。

妹は空襲解除になったので兵器へ電車で行っていたのだそう。車中どこかのおばさんが『また空襲があるから兵器は危い。家に帰りなさい』と勧めるので帰る途中稻佐橋でピカドンに遭ったのだそう。電車内のおばさんは神さまのように思えた。近くの防空壕に入り夜になって帰って来たのだそう。

夜、防空壕から出て見たら石に腰かけていた人が全身やけどでこの人が顔の見わけがつかなかった。着物はボロボロここまでどうして来たのかと思った。私は着物の端に目覚えがあった。近所の中富のおばさんが水道の手続きに行ったことを直感した。『中富のおばさんではないの』と尋ねると、うなずかれるだけで言葉も出なかった。友人（中富の子供さん）が兵器に行っていたので心配していたらおばさんまでこんな目にあって。おばさんはやけどをしながらも子供がここに来るからと思って必死で来たのであろう。私は『兵器はだめだった』とはいえなかった。

長崎全市が焼けているように見えた。父が『家も焼けてしまった。元気で助かったことを思うと家なんか』といったが、父にしては今までの苦勞が一瞬にして灰になったのだからその気持ちはよくわかる。でも荷物を疎開していても人間がだめになつてはなんにもならない。

防空壕にいたとき、出血が止まらないといっている人がいた。私は暗やみの中で声を頼りに『ここですか』といつて指で一生懸命押えて止めてやった。

翌日防空壕から出ていたら、私の声を覚えていてその人は喜んでお礼をいわれた。

私どもは食べる物、着る物も無いので、一日も早く田舎へ行きたかつた。

道ノ尾駅から被爆者輸送一番列車が出ると聞いたので、隣の伊藤さんの家族と私の家族と一緒に南高来郡大三東（現在有明町）の父の郷里に行くことにした。道があるような無いような所を歩ける人は列をつくつたように黙々と歩いた。

いつ空襲があるかもしれないので、防空ずきんだけはいつでもかぶれるようにしていた。

途中大学前、大橋付近に行くにつれて被災の様子はひどく、一面焼け野原で到底言葉では表現ができない有様。「水！水！」という声が聞こえてくるが、何一つしてやることもできず、ひどいようだが疲れ切つた自分の体を動かすのが精いっぱいだった。

路傍にうずくまっている人、路上に倒れて息も絶え絶えの人、本当に生き地獄とはこんなものか。その人たちにも手を差し伸べることのできない自分の体だった。

防空壕を出発して何時間かかったであろうか、その日の夜やっとの思いで道ノ尾駅にたどり着き一番列車に間にあつた。

諫早駅に汽車が着いたので下車したが、島原行きの列車は翌朝まで待たなければならぬ。

仕方なく私たちはその晩は諫早で泊まることにした。

諫早駅近くの民家の軒下でも庭先でもよいからと思い一夜の宿を近くの人に頼んだが聞き入れてもらえず、お寺の境内のような所で夜を明かした。そこには私たちのような人がほかにもたくさんおられたことを覚えている。

長崎から命からがら逃げてきた私どもに、被害も受けず平和な生活が続けることのできる人の冷たい仕打ちに、一まつの寂しさと憤りを感じた。

翌朝島原行きの一列車に乗るためホームを急いでいたら、「坂本さん」と声をかけられたので、ふりかえるとお友達の井川さんだった。地獄に仏とはこのことか、大変うれしかった。

（お兄さんを捜しに行くとか）

大三東駅に着き、父の実家に行くと、皆で温かく迎えてくれて、久しぶりに人間らしいふん囲気に浸った。

叔母たちは、長崎は全滅だと聞いていたので、私たちが生きて帰るとは思っていなかったと見えて、本当に喜んでくれた。

八月十四日ごろやっと疲れ切った体をいやしていると、叔母がモジモジしながら申し訳ないようなそぶり、一片の紙切れを私に渡した。見ると日赤長崎県支部長からの電報だった。

『直ぐ出頭せよ』との召集令状が本籍地であるここに届けられていた。

あの原爆の生き地獄からやっとの思いで、抜け出して安住の地を求めて着いたばかりだけに、再びあの悲惨な世界に引き戻されると思えば、出頭することをためらったが、『私は日赤看護婦だ。』『ここ深くじてはいけない』と自分で自分に言いきかせて早速出発することにした。

召集令状を手にして私はすぐ大三東駅に行き駅員に令状を見せると、すぐ長崎行きの切符を手に入れることができた。

日赤支部へ到着したら長崎経専に行くようにいわれた。経専には同級生が何人か来ていて井川さんもいた。

あの広い学校の講堂の壇上まで患者でいっぱい。次から次と毎日のように患者は増えるばかり。夏で白いシャツを着ている者が多い。光はそれを通しやけどもシャツの形をしたような者もいた。外傷、骨折、やけど、足の踏み場もないほどになった。放射線が当たった場所によってやけどの部分も違っていった。

背中のやけどの人は腹ばいのまま、傷口からはウジ虫がわき、取って治療してもまた出た。治療にはリバノールガーゼが多く使われた。患者も大変だったが私も看護婦もがんばった。日がたつにつれ今まで外傷一つなかった人が髪の毛が抜け始めて、つるつる坊主になり、全身に斑点が出来た。そして下痢、高熱を出し、次々に死んで行った。

また患者同士同じ症状が出たら次は自分ではないかと心配していたが、それが本当になって数日後には死ぬ人もあった。身元引受人がいる人はよい方で、原爆で親子知人皆死亡している人が多いので、だれもない人は毎日のように大八車でたくさん死体を載せ、係りの人が連れて行かれた。また県立高女前でも毎日のように火葬の煙が続いていた。

一方病室では全身やけどの人がお産が近まり大変な騒ぎ。牟田さんのお母さんが馬町で助産婦をしておられたので牟田さんはお母さんを連れて来てやと間に合った。兵隊たちは早くから『お湯が沸きました』と、お湯の心配ばかりしていた。元気な子供のうぶ声の間こえたときは本当にすばらしいことだと思った。私どものあの原爆救護の悲惨な中でただ一つの明るい思い出としていつまでも記憶に残ることであろう。大坪の叔母が桶屋町に居たので赤ちゃんに着せられるような物を取りに行った。ときどき叔母が湯を浴びせに来てくれた。

軍医、衛生兵、私ども看護婦は村田婦長の下で原爆救護に力を合わせて勤務した。そのうち愛媛の日赤救護班が何日か応援に来てくれた。

私が原爆救護を終え陸軍病院に勤務していたとき、時津の左底から、中富さんが荷物を疎開させていた親類の人を尋ねて病院にきた。中富さんは兵器にいたのもうだめだと思っていたら、左底までたどり着いたが重体だとのこと。私に会いたいとのことだったので、早速会いに行ったところ、涙を流して喜んでくれた。私は彼女の元気なときのことを思い出し、ピカドンが憎かった。こんな体にしてしまって、本当に気が重かった。少しでも彼女が元気になり樂になればと思って、それから何日か勤務が引け次第左底まで治療に通った。何の薬も手当もだめだった。

こんな人は当時多かった。家の中で親類の人に見守られて亡くなる人はまだ幸福な方。二人しかいない母子が原爆で命を亡くし疎開した荷物だけが残っていたという話もある。

諫早駅で会った井川さんとはその後原爆救護、陸軍病院、慈恵病院、市民病院と、私が昭和四十九年四月退職するまで一緒に勤務した。